

選択的実在論をいかに擁護するか

大西勇喜謙 (YUKINORI ONISHI)

京都大学

科学的実在論論争（以下実在論論争）における代表的な争点としては、決定不全性の問題と悲観的帰納法の2つがあげられる。前者は、我々の最善の理論と同じ証拠を救いつつも観察不可能な事柄についてはかなり異なったことを述べる実質的な対抗理論の存在可能性を問題視するものであり、後者は、過去に経験的成功を収めた理論が後に棄却されてきたことから、現在成功している理論に対しても同様の疑いを投げかけるものである。このうち前者については、そうした可能性をまともに受け止めるべき理由を、実在論側が反実在論側に求めており（つまり立証責任を反実在論側においており）、ある種の膠着状態にある。一方後者については、実在論側もこれを真摯に受け止め、これに対処すべく様々な立場が提案されてきた。こうした立場の多くが採る戦略が、理論転換においても棄却されないような部分に実在論的信念を限る、というものである。

Kyle Stanford (2006) は、こうした実在論者 (Phillip Kitcher, Stathis Psillos, John Worrall が主な標的) の戦略を「選択的確認戦略 (Selective confirmation strategy)」とよび、これに対する批判を行っている。そこで問題とされるのが、理論の確認されている部分を同時代的に同定するための科学者の（あるいは人間の）能力である。Stanford によれば、Lavoisier, Weismann, Maxwell らは、自身の理論のうち、後に棄却された部分を、その理論の成功に必要な不可欠なものとして真理性を確信していた。こうした事例は、選択的確認戦略を用いたところで結局我々は現代の理論のどこを信じればよいか分からず、このような戦略は実在論者にとってあまり有効な避難場所 (refuge) とはなっていない、ということを示唆している。

本発表では、こうした選択的実在論批判を *No refuge argument* (NRA) とよび、これに対する実在論側からの応答法を提案する。アイデアは、Peter Lewis (2001) による悲観的帰納法批判を NRA へと応用しようというものである。Lewis は悲観的帰納法に対して、これをいわゆる「偽陽性の誤謬 (*Fallacy of false positives*)」の一種として無害化する試みを行っている。NRA もまた歴史的失敗例からの悲観的な帰納であることを鑑みれば、このような応用可能性は想像に難くない。もっとも Lewis (2001) に対しては、Worrall, Juha Saatsi (2005), Brad Wray (2011) などから様々な批判が寄せられており、悲観的帰納法批判としては一般的支持を得ていないのだが、NRA への応用においては、こうした批判のうち、発表者がもっとも重要と考えるある種の批判を回避できていることを確認する。